エネルギーいんふぉめいしょん
2001.11月号

焦点

対テロ「戦争」の行方——
世界は、エネルギーは、どうなる

二十一世紀はどんな世紀か、展望も付かぬまま、空前の同時多発テロが勃発した。超大国の責任と面子を賭けたブッシュ大統領のイニシャチブの下、東西諸国の幅広い支持を得て、アフガニスタンに蟠居する首謀者とその支持者を炙り出す「テロ根絶」の戦いが続いている。しかし、取り敢えずの決着がどんな形になるにしろ、歴史的にも人種的にもまた宗教面でも、極めて複雑な地域であり、また、「文化の衝突」が底流にあるだけに、この世紀が「人類文化の変曲点」になるきっかけを提供するかもしれない。その「変曲点」を新世紀のルネッサンスの始まりにするだけの英知を、果して世界は示し得るであろうか。

エネルギーはどうなる——油断は禁物

さてエネルギー情勢に関するかぎり、今のところ、湾岸危機の時とちがい、需給は安定しており、価格は逆に低下傾向にある。これは、テロで加速された世界的な経済不況もさることながら、基本的には、各国が節約とエネルギー源の多角化を計ってきたお陰であろう。したがって、日本のような無資源国としては、原子力や新エネルギーの適切な利用を中核としながら、石油資源の動向を注視しつつ、安定確保への努力を怠ってはならない。今回の動乱の成り行きを見ていると、その後の国際的な力関係が大きく変わる可能性も大きくなりつつある。エネルギー関連だけで見ても、まず、中近東とそれを取り巻く地政学的情勢は、一変するに相違なく、産油国関連の地殻変動は予断を許さない。別の面の一例として、動乱の収拾に大きな役割を果たしつつあるパキスタンがある。同国は、核兵器製造による「被制裁国」の立場から、一転して今回の戦争への「功績」を主張出来る立場につく可能性がある。その結果、従来の国際核不拡散体制に新たな難題が持ち込まれ、その成り行きによっては、「灰色国」の核兵器取得への意欲を刺激し、・・と考えればキリがない。

既に世界の電力の六分の一を供給している原子力発電は、同時に石油情勢安定のエースでもある。平和利用の秩序の再構築ため、新たな国際枠組みの提案等も、日本のイニシャチブが期待されてくるであろう。

（K・M　十一月六日記）